

[公演ノート]

## 第12回中村岩城オルガンリサイタル報告

# A Report of IWAKI NAKAMURA's 12<sup>th</sup> Organ Recital

中村岩城

Iwaki Nakamura

〈抄 録〉

2015年11月14日（土）に日本基督教団小松川教会にて開催されたオルガンリサイタルの報告である。オルガン設置までの経緯、現在（2015年）のオルガン事情、リサイタルに於ける新たな取り組みと今後の展望を述べたものである。

キーワード：オルガン、ヨーロッパ教会事情、ビジュアルコンサート

Abstract

This is a report of the organ recital held at the Japanese Christian Community Komatsugawa Church on Saturday, November 14th, 2015. I wrote about details of the organ installation, the present circumstances of the organ (2015), and the new initiatives and future prospects regarding the recital.

Keywords: organ, church circumstances in Europe, visual concert

### 1. はじめに

2015年11月14日（土）、自主リサイタルとしては4年ぶりとなる第12回オルガンリサイタルを東京都江戸川区北葛西に建つ小松川教会にて開催した。この教会は私が幼少の頃から毎週通い、17歳からオルガニストを務めている教会である。小松川教会の創立は1926年4月15日で2016年には創立90周年を迎える歴史ある教会である。もとは江戸川区平井の地にあったが東京都道路計画（補助120号線）のおりを受け1994年1月に北葛西の地に移転した。

移転当初からパイプオルガンの購入計画はあったものの、購入資金が移転に伴う他の備品購入や借金返済に優先され、中々設置まで到達することが出来なかった。教会移転から約20年の歳月が経ち、

いよいよ購入に向け真剣に考え始めた2012年に、オランダのゼーラント州カペレ市にある教会から売りに出されたオルガンを落札し、半年の月日を経て2013年9月、小松川教会に念願のオルガンが設置された。購入計画から実に20年の歳月がかかった訳であるが、今回はそのオルガンの披露も兼ねたりサイタルの開催となった。

## 2. オルガン入手の経緯

### 2.1 ヨーロッパの教会事情

今回オランダのゼーラント州カペレ市にあるカペレ・ピーゼリンゲ・エーヴェルスタイグ・プロテスタント教会 (De Protestante gemeente te Kapelle-Biezeling-Eversdijk) が売りに出したオルガンを、小松川教会が落札した訳であるが、これはカペレ市教会がオルガンを新しく買い替えるために売りに出した訳ではない。実は教会閉鎖に伴う処分品として売りに出されたのである。現在のヨーロッパにおける教会事情は、残念なことに、毎年教会員が増えて集まる献金が多くなるという状況ではないようである。オランダだけではなく、フランスにおいても教会経営が成り立たなくなり、閉鎖に追い込まれた教会は数多いと聞く。またドイツにおいても教会員そのものは何千を数えるのに、毎週の礼拝出席者は数十名、集まる献金の乏しい事情を耳にする。

もちろん全ての教会がそのような状況である訳ではないが、1990年以降プロテスタント、カトリックを問わず、教会の閉鎖また若者の教会離れはよく耳にする。今回オルガンを売りに出したカペレ市教会も隣町の教会との合併が決まり、閉鎖する運びとなったようである。インターネットの普及により世界中が大変近いものになり、また大変便利な時代ではあるが、世界中で教会そのものの存続の危機が迫っていることは落札しオルガンを買い付けた喜びの反面なんとも言いようのない不安と虚しさを感じる出来事である。

### 2.2 オルガン落札までの経緯

オルガンという楽器は決して安いものではない。小松川教会でも当初設置の計画に上がっていたオルガン購入予定金額は4,000万円で、移転に伴う購入計画では予算が取れていたため、1995年頃には教会に設置されている予定であった。しかし、いざ移転をしてみると色々予算が足りない事項が重なり、結果「オルガン資金の一部借り入れ」という形で他の設備充当にその資金が宛がわれ、その繰り返しが続いた。礼拝の奏楽には江戸川区平井の地で使っていた電子オルガンをそのまま移設し使っていた状況であった。

その電子オルガンも老朽化が進み、2012年春頃から今後どうするかを教会で何度も話、結果現在残っているオルガン購入資金には今後手を付けない (当時の残額は2,000万円程度)、今後はオルガン購入の献金を再度募り10年後を目処に設置、というかなりの長期計画が打ち出された。また、何か他に良い策はないかを検討していくことも提案された。

教会総会で上記のことが決定して間もなく、オランダにてオルガンの製作修理の会社に勤める傍ら、最近頻りに売りに出されるオランダ国内の教会のオルガンを日本に輸出したいと考える日本人の方から教会に連絡が入った。その内容は小松川教会にサイズが合う状態のよいオルガンが売りに出されたがどうかという内容のものであった。たまたま紹介して下さった日本人の方が帰国していることもあり、教会まで訪ねて来て寸法を測りピタリと入ることが確認され、また現地で録音したオルガンの音色も聴かせてもらった。オルガンは既製品を買い付けることはなく設置する建物に合わせて設計し、何度も話し合いを繰り返し購入する。発注から設置までは家を建てることとよく似ている。今回

のように全くサイズ等の手直しの必要も補修の必要もない状態での移設は極めて稀である。更に売値が6万€（当時1€=100円）であったため日本円で600万円程度（同様のモデルを日本で発注、購入した場合は2,500万円程度の楽器である）、輸送費また現地解体費と教会設置費を込みでも1200万円程度で収まるという好条件であった。

落札の条件は、手付金の1万€を最初に収めた団体という条件が出されていたため（実はノルウェーの教会でも落札を考えているとの情報があった）2012年12月30日に教会では臨時役員会を開催、購入決定を即決し1万€を手付金として入金し、無事落札に至った次第である。なんとも偶然と必然が重なり20年の月日を経て2013年9月にパイプオルガンが江戸川区の小松川教会に設置されたのである。ちなみに江戸川区に於けるパイプオルガンの設置は、教会・公共施設を通じて初めてのことであった。

### 3. オルガンリサイタルの内容

#### 3.1 今回のリサイタルの目的とビジュアルコンサートへの挑戦

2015年11月現在、設置以来約2年が経ち、礼拝の奏楽や奉獻演奏、音楽礼拝等で音を奏でてきたオルガンであるが、教会員・地域住民・音楽関係者に披露するリサイタルを計画する必要性を感じるようになった。自主リサイタルでは楽曲の選曲はもちろんのこと、チラシ作成、プログラム作成、チケット作成からチケット販売計画まで色々なことが必要となる。大変な作業また労力を必要とするが、1つ1つの作業が完了し進んでいくことは充実した時間を感じる時でもある。小松川教会でのリサイタルは今まで前例がないため、教会におけるリサイタルのマニュアル作成も含め計画しなければならなかったため更に大変であった。

最も大切な楽曲の選曲では、今回「設置楽器の披露」を念頭においたプログラムで構成した。選曲では《トッカータ》という曲名に注目をした。トッカータとは音楽事典等で「鍵盤楽器において速いパッセージを伴った即興的楽曲で技巧的な表現が特徴」と説明される曲種である。作曲家が《トッカータ》の作曲を試みる時とはどのような時かを考え、そこには精神的な安定と作曲技法の充実した時期が重なっていたであろうという判断をした。楽器の披露に相応しい華やかさと喜びを伝えるには、この曲種は最も相応しいのではないか。実際この「トッカータ集」は楽器の披露に相応しい華やかな演奏会となった。

プログラム楽曲及び曲目解説は次項に記すとして、もうひとつ今回試みたことがある。それは、昨今オルガンの演奏会で行われている「ビジュアルコンサート」への挑戦である。

オルガンに於けるビジュアルコンサートとは映像にて演奏している手と足をスクリーンに映し出す演奏会のことで、東京ではオペラシティのコンサートホール、また大阪ではいずみホール等が行って



いる演奏会である。通常ホールの前面に設置されているオルガンでも足鍵盤の動きはあまりよく見えない。オルガンは両手両足を使い演奏する楽器なので、その両方を映し出すことでオルガニストの演奏技術がより具体的にわかり人気となっている。

教会の場合、オルガンそのものが会堂の2階後方に設置されることが多く、小松川教会もその形をとっている。つまり映し出すことをしなければ聴衆は後方2階から響くオルガンの音色にのみ耳を傾けることとなる。それにはそれなりの良さがあり音楽に集中できるが、演奏者が全く見えない演奏会は確かにあまり面白いものではない。かといって手足の動きを映し出しての演奏会はどうしてもその映像に目が行ってしまうので、本来落ち着いて聴いてもらいたいと願う演奏者側からは若干の抵抗もある。しかし、このビジュアルコンサートは現在人気で、東京・大阪とも結構な集客に繋がっている。幸い小松川教会の前面に巨大なスクリーンが完備されていることもあり、今の流行りを取り入れた演奏会に今回挑戦する決意をした次第である。

映像撮りには玉川大学芸術学部の小佐野圭教授にご協力頂き、スクリーンに演奏している手足を映し出し演奏会を行った。終わった後の感想はやはり足鍵盤の動きに注目が集まってしまう結果となったが、評判は上々で、この形の演奏会が定着すれば今後の演奏会の集客に繋がるのではないかという結論を得たように思う。

### 3.2 オルガンリサイタルのチラシとプログラム

**Iwaki Nakamura Organ 12th. Recital**  
2015 11/14 Sat.  
15:30 OPEN 16:00 START

**第12回 中村岩城 オルガン・リサイタル**

**トッカータ集 I 演奏曲目**

トッカータ 第6番 1長調	G. ムファット
前奏曲とアーガ 聖へ短調 Buxtehude	D. フクスターデ
トオソナタ 第2番 ハ短調 BWV526	J.S. バッハ
トッカータ 1長調	T. ズボロフ
トッカータ アダージョとアーガ ハ長調 BWV564	J.S. バッハ
トッカータ ハ長調	J.P. スウェーリク
ソナタ 第4番 変ロ長調 作品65-4	F.メンデルスゾーン

中村 岩城 (なかわら いわき)  
1988年玉川大学芸術学専攻オルガン課程卒業、1989年同大学芸術専攻科修了、  
専攻科修了年の8月に第1回リサイタルを開催し好評を博す。  
リサイタルの開催は今回で2回目となる他、管弦楽団・吹奏楽団との共演、また  
ピアノ伴奏者としても活躍があり、各地での演奏会等、幅広く活動している。  
特に第10回リサイタルではJ.S. バッハのトオソナタ (BWV525～530) 全曲  
演奏を行い、好評を博す。府中の神宮前劇場市民オルガン講座の第四期講師  
を務めた他、大学で専攻の指導にあつている。  
現在、玉川大学芸術学専攻芸術教育学科准教授・日本基督教団川崎教会オルガニスト  
日本オルガニスト協会会員・キリスト教礼拝音楽学会会員

2015年11月14日(土)15:30開場/16:00開演  
チケット 前売 ¥2,500 当日 ¥3,000  
お問い合わせ 047-336-2675 (中村)

会場：日本基督教団 小松川教会  
〒134-0081 東京都江戸川区北葛西4-3-9  
TEL.0338295281 FAX.0338295282

●最寄り駅  
1 小松川駅(有楽町線)徒歩2分  
2 宇田川駅(有楽町線)徒歩2分

●最寄りバス  
西葛西駅(東武線)より徒歩15分  
船橋駅(東武線)より徒歩20分

\*数回には駐車場がございません。公共交通機関をご利用ください。

#### 「トッカータ集I」について

今回はバロック時代の作曲家の《トッカータ》を中心にプログラムを構成した。(下記プログラム参照)。今回楽曲を選曲していく上で近現代まで含め多国の作曲家が作曲した鍵盤楽器作品の中に

《トッカータ》の作品が意外に多いことがわかった。「トッカータ集」をテーマにした演奏会を第2回、第3回と続けていくことは今後の演奏活動の重要な核となりそうである。

### Program

1. 前奏曲とフーガ 嬰へ短調 BuxWV146 D. ブクステフーデ
2. トリオソナタ 第2番 ハ短調 BWV526 J. S. バッハ
3. トッカータ、アダージョとフーガ BWV564 J. S. バッハ
4. ソナタ 第4番 変ロ長調 作品65—4 F. メンデルスゾーン  
—休憩—
5. トッカータ 第6番 ト長調 G. ムファット
6. トッカータ ハ長調 J. P. スウェーリンク
7. トッカータ ト長調 T. デュボワ

### Program note

◆ 前奏曲とフーガ 嬰へ短調 BuxWV146……D. ブクステフーデ (1638—1707)

ディートリッヒ・ブクステフーデは、J. S. バッハに多大な影響を与えた作曲家であり、また北ドイツオルガン楽派の重要な作曲家の1人である。1668年に僅か30歳でリュベックの聖マリア教会のオルガニストに就任した。その後、終生その職にあたり、多くのオルガン曲を作曲し、また多くの弟子を育て上げた。

この曲は他のブクステフーデの作品と同様、明確に急・緩・急・緩・急の構成を持つ作品で、題名こそ「前奏曲」と付けられているが冒頭の部分はトッカータ的な要素が強い。彼の作品の中では比較的短い楽曲であるがその構成には無駄がなく、現在もよく演奏される曲である。

◆ トリオソナタ 第2番 ハ短調 BWV526……J. S. バッハ (1685—1750)

J. S. バッハは、ライプツィヒ時代 (1723年～1750年) に宗教音楽の完成、ポリフォニー音楽の完成、そして鍵盤音楽の可能性の追求という仕事に集中したと考えられる。鍵盤楽器の可能性の追求では、室内楽的要素をオルガン音楽の中に高い密度で組み立ててその実行を試みた。その代表作が6曲からなるトリオソナタ (BWV525—530) である。

演奏には右手・左手・ペダル (足) がそれぞれのパートを担当し、弾きわけなければならないためそれ相当の難しさが課せられる。トリオソナタはオルガニストを悩ます最大の難曲であると同時に、またオルガン曲としては卓越した最高傑作であると言えよう。

第1楽章 Vivace 2分の2拍子 リトルネロ形式

第2楽章 Largo 4分の3拍子 2部形式

第3楽章 Allegro 2分の2拍子 リトルネロ形式

◆ トッカータ、アダージョとフーガ BWV564……J. S. バッハ (1685—1750)

この曲はバッハがイタリアにおける協奏曲の形式 (3楽章構成) を巧妙にオルガン曲に用いた唯一の作品で、特にアダージョの部分は明らかにヴァイオリン協奏曲の緩徐楽章の様式を模倣している。トッカータの冒頭部分には1ページに及ぶペダルソロを備えた荘厳な楽句があり、その後前奏曲風の楽節が続く。バッハのヴァイマル時代 (1708—1717) を代表する秀作である。

◆ ソナタ 第4番 変ロ長調 作品65—4……F. メンデルスゾーン (1809—1847)

メンデルスゾーンは、バッハの「マタイ受難曲」をバッハの死後再演を果たし、バッハの偉大さを

再び世に知らしめた人として広く知られている。彼は晩年にオルガンソナタを6曲書き上げた。6曲はどれも洗練された技法のもとに深い音楽的内容が盛り込まれた作品に仕上がっている。この第4番は6曲中最も華やかな曲である。第1楽章は流れるような分散和音の連続で始まる。また最後の第4楽章は荘厳な曲調を保ちつつ絶え間なく弾かれるペダルパートが大変印象的な作品である。

第1楽章 Allegro con brio 4分の4拍子

第2楽章 Andante religioso 4分の4拍子

第3楽章 Allegretto 8分の6拍子

第4楽章 Allegro maestoso e vivace 4分の4拍子

◆ トッカータ 第6番 ト長調……G. ムファット (1653—1704)

ゲオルク・ムファットはフランスのムジューヴ出身であるが、本人は何故かドイツ人という自意識を持っていたようである。1680年頃にイタリアを訪問した際アルカンジェッロ・コレッリに出会い、その作風に大きく感銘を受けた。ムファットはオルガン曲としてトッカータ、パッサカリア、シャコンヌ、アリアと変奏などを数十曲作曲しているが、それらの作品は後のフランス、イタリアの作曲家に多大な影響を与えた。

本日演奏するトッカータ第6番は荘厳なコラール風な響きで開始される。楽曲の流れは完全なる5部分に分かれており聴く者を飽きさせない工夫が随所に見られる作品である。

◆ トッカータ ハ長調……J. P. スウェーリンク (1562—1621)

ヤン・ピーテルスゾーン・スウェーリンクは本日演奏しているオルガンが制作された国、オランダで活躍した作曲家兼オルガニストである。彼は北ドイツオルガン楽派の育成に寄与した他、教会音楽会の基礎を作るなど教会音楽またオルガン音楽の歴史を語る上では必ずその名前が出る人物である。彼のその功績はオランダ国においても認められており1970年代にはオランダ紙幣にその肖像画が描かれたほどである。

本日演奏する「トッカータ ハ長調」は単純な構成でありながら、次々と音形・リズムを変化させクライマックスを迎える洗練された技法で書かれた作品である。

◆ トッカータ ト長調……T. デュボワ (1837—1924)

テオドール・デュボワはフランスのロスネー出身の作曲家兼オルガニストである。1861年にローマ大賞を受賞。1871年にセザール・フランクの後任としてサント＝クロチルド教会の楽長に就任、その後1896年パリ音楽院院長の職務に就くが1905年にある事件の引責辞任に追い込まれる不運に見舞われた。デュボワは大変高い能力を持った作曲家であるため、この事件がなければラヴェルやフォーレ同様現在も世界的に名前の知れた作曲家である可能性は高い。また教育者としても著名で教育用に書かれた「和声法・理論と実践」や「対位法とフーガ」は現在も音楽大学で使われることがある。このト長調のトッカータは短い曲であるが絶え間なく続く16分音符の音形が非常に華やかな楽曲である。

デュボワのあふれる才能が随所に見られる名曲と言えよう。

## 4. まとめ

今回のリサイタルにおける一番の収穫は、やはり演奏をカメラで撮りスクリーンに映し出す、ビジュアルコンサートに挑戦したことのように思う。日本のようにキリスト教信仰が土台にない国で、オルガン音楽の普及を前向きに捉え行っていくには、一つの手段として定着させたい形である。日本においてオルガンは、1度は聴いてみたい楽器ではあるがチケットを購入してまで聴きに行きたい楽器で

はまだまだないように思う。今回のビジュアルコンサートは前項で述べた小佐野圭教授の協力があったて実現した訳であるが、その他にも私がオルガニストを務めているということで多くの教会員の方々にもご協力頂いた。次年度には教会のすぐ裏に大きな総合病院が建つ。教会という門をくぐりやすくする機会としては、ランチタイムコンサートのような教会に於ける音楽会は有効であろう。この教会でのオルガン演奏が、隣接された病院に来る方々を慰め、また地域の方々の安らぐ時間に用いられるとすれば、それは「芸術を通して行われる社会貢献」になると考えられる。オルガンを堅苦しい楽器ではなく人々を魅了する楽器として活用するために、今後も教会におけるビジュアルコンサートを定着し演奏していきたいと思う。

#### 参考文献

- 『新編 世界大音楽全集 器楽編23 オルガン名曲集Ⅰ』音楽之友社、1998年  
『キリスト教音楽の歴史』金澤正剛、日本キリスト教団出版局、2005年  
『バッハのオルガン作品』ヘルマン・ケラー、音楽之友社、1998年